

東南アジアブックス

TAN TECK HOCK
陳 德 俊 編

シンガポール華文小説選(上)

1945—65

福 永 平 和・陳 俊 勲 訳



井村文化事業社 発行
勁 草 書 房 発売

TAN TECK HOCK
陳 徳 俊 編

シンガポール華文小説選（上）1945-65

福永平和 訳
陳 俊 勲

井村文化事業社

訳者紹介

福永平和 (ふくなが・へいわ)

1946年 東京生れ

1968年 早稲田大学政経学部卒業

毎日新聞社入社

大阪社会部、鳥取支局を経て

1971年から東京社会部記者

陳 俊勲 (Chen Chun Shun)

1950年 台湾生れ

1978年 亜細亜大学経済学部卒業

1980年 筑波大学地域研究科修士課程修了

現在、同大学社会科学部研究科経済学博士課程

東南アジアブックス

シンガポールの文学 1

シンガポール華文小説選 (上) 1945-65

1983年 8月20日 第1刷印刷

1983年 8月31日 第1刷発行

定価 1,800円

訳者 福永平和 ©
陳 俊勲

発行所 株式会社 井村文化事業社

東京都渋谷区道玄坂2-16-3

発売所 株式会社 勁草書房

東京都文京区後楽2-23-15

電話 03-814-6861

振替東京5-175253

落丁・乱丁本はおとりかえします

製版／清水印刷 印刷／港北出版印刷 製本／谷島製本

0397-977900-1836

編者まえがき

シンガポール華文学は、約六十年の歴史を持つ。華文学の発展は三つの重要な段階に区別することが出来る。

- (一) 第二次世界大戦終結以前（一九四五年以前の時期）。
- (二) 第二次世界大戦以後、シンガポール独立（一九六五年）までの時期。
- (三) シンガポール独立以後（一九六五年以後）。

とりもなおさず、シンガポール華文学は内容、テーマの面からいえば、社会の発展に従い、一九四七年に始まったといえよう。シンガポールの作家は、中国から渡ってきたか、シンガポールで育ったかは問わず、思想、意識の面でも、根本的に変化が起きたのだった。それは、まさにシンガポール文学が、中国文学の支流あるいは付属物ではなくなり、描くものも数千里離れた中国の人物、風景ではなく、熱帯の地であるシンガポールの情況を忠実に反映したものとなった。さらに、作品の文章には、常にシンガポールの人々が常用する口語や方言が使われ、濃厚な地域色をかし出している。

今回、選出された小説は、シンガポール・マラヤ華文学大系の中からより抜いたシンガポール作家の代表作ばかりである。作品は時代を反映したもので、今回は一九四五年から一九六五年の間

に発表された十六人の作家による十七篇の作品を紹介する。

シンガポールにはプロの作家はいない。小説はすべてアマチュア作家によるものである。しかし、独立後は、高いレベルを持つ文学作品も数多く発表されている。この時期（一九六五年以降）の作品は、近く紹介されることになろう。

目次

河辺にて……………	苗	秀……………	1
中秋節……………	趙	戎……………	25
「阿 O 伝」……………	絮	絮……………	36
客……………	于	沫我……………	53
夜逃げ……………	謝	克……………	66
心のやましさ……………	李	汝琳……………	77
虐待……………	孟	毅……………	98
迷いのあとの選択……………	李	過……………	112
風と共に……………	李	学文……………	140
縁……………	陳	瑞猷……………	153
荒野の子供……………	洛	萍……………	171
彼女の服に魅せられて……………	華	庸洲……………	194

人と犬との間		陳	文察	220
日暮れの道なお遠し		韋	西	234
泥棒物語		高	静朗	244
第七橋の下		芥	原	266
帰郷		苗	秀	317
解説と訳者あとがき		福永	俊和	331
		陳	俊和	331

河 辺 に て

ミヤオ・シイウ
苗 秀

1

河辺を一陣の湿った風が吹き抜けた。黒く濁った河。日中の太陽で蒸発し、河の表面に張り付いていた臭気が、あたりにまき散らされていった。

河の向う岸には、熱帯特有の高床式のニッパ・ハウス(1)が一行に並んでいる。昼間、河の水はハウスの下まで流れ込む。そのまた向うには造船所がある。その頃、造船所の苦力は、みな帰ってしまい、造りかけの木のドンガン(2)が臭い泥水の上に横たわっている。まるで、古生代の恐竜の骨のように。

黄昏の空はあつという間に暗くなり、大地も急に見えなくなった。厚い灰色の雲が、西に没していく太陽をさえぎっていた。河畔に立ち並ぶパンヤ(3)の木は、黒緑色に変化し、とりわけ気味悪く見えた。遠くの方では遊園地の上空が明るく光っていた。場内の店、食物の屋台、劇場には、みな灯がともり、客を迎える準備を整えていた。

「そろそろ、また雨になりそうだわ。」

沙梅^{シャメイ}は空をちょっと見上げ、ひとり言を言い、足を早めた。金昇橋^{オレン・シムン}を横切り、石段をいくつか下りて河べりの石段まできた。

雨が降り始めたら、病院へ行つて、あの男^{おとこ}を見舞うのは面倒になると思った。道路はシルツル滑るし、雨を避ける走廊⁽⁴⁾さえもない。トライショー⁽⁵⁾に乗る金もない。でも今夜は行かなくては。ここ二晩も見舞いに行つてないのだから。

沙梅は、さつき牛^{ニイウ・ナム・シム}車⁽⁶⁾でヒマをつぶしたことを悔んだ。

今日は三十日で、沙梅は午後、授業が終つたあと校長の所へ行き、給料残金の二十ドル⁽⁷⁾をもらい、すぐ牛車水へ行つた。買わねばならない日用品の他、特別に、病院にいる男のためにリングを買つた。さらに四ドルも使ってオーストラリア製のビスケットを買つた。最初、沙梅は「高過ぎる」とケチをつけたが、菓子屋の店員は「でも、この品物は光復後⁽⁸⁾、オーストラリアから来た舶来品ですよ」と言つた。

三年八ヵ月もの日本軍占領時代、タピオカ⁽⁹⁾しか口に出来ない貧しい生活をしてきた後なので、とび切りおいしいビスケットはもちろん贅沢品だ。でも沙梅は買つた。一箱のビスケットが病人にもたらす大きな喜びを考えれば、四ドルはそれほど高いものではないと思つた。

戦争はやつと終つた。東洋鬼^(日本軍)は、一九四二年春のオーストラリア兵捕虜より、もっとみじめな、絶望的な表情で収容所へ入れられた。この植民地の人々はホッと一息つき、再び訪れた自由な太陽の下で、幸せそうに微笑んだのだった。

思いもよらぬことだったが、生活は依然として苦しかった。戦争はすべてを破壊してしまつた。この戦争がもたらした苦しみの代価をさらに長期にわたつて支払わねばならなかったのだ。

この苦痛の日々は沙梅の額にも二本のシワを刻み込んでいた。彼女はもとと美しかったのだが、そのころ、誰も彼女の美しい顔に青春のかけらを見ることができなかっただろう。ただ、二つの大きな眼には、まだ人の心を動かす光がひらめくことがあった。憂うつな感じはあったが、生活の重圧に完全に打ちひしがれることなく、生きる望みから燃え出た光であった。

当時、二つの眼には、このような光が燃えていたのだった。

沙梅は今月の給料がもう一ドル数十セントしか残っていないことを知っていた。来週の生活費は苦しくなる。しかし、今は小学校教員の仕事がある。月にたった四、五十ドルの収入ではあっても、半年前、イギリス植民地政府が戻ってきて、日本軍のバナナ軍票(原註)をすべて無効とし、いとこ姉さん(10)を頼って生活していた頃よりは、少しはましであった。

河の対岸から湿気を帯びた風が吹いてきて、長い髪が鼻先にたれた。足を止め、右手に持っていた包みを、左手に抱えていた大きなズツクの袋に入れ、右手で髪をかき上げた。ここに立つと、自分の住む小さなニッパ・ハウスの屋根が見え、傘のように屋根をおおっているチェリー(11)の木が風に吹かれ前後にゆれていた。

急に気ぜわしくなった。早く家へ帰り、夕食の仕度をして、いとこ姉さんの所へ行き、子供を連れ帰ろうと思った。そして、雨が降り出す前に急いで病院へ行かなければ。朝、学校で見た新聞記事を思い出した。戦争中に発明された結核の特効薬で「エサンブール」とかいう名前だった。記事には、この特効薬の効果が極めて強く、近いうちにシンガポールでも売り出されると書かれていた。なんと素晴らしいニュースだろう。沙梅はこのうれしいニュースを一刻も早く、病院で寝ている阿代(12)に教えてあげたかった。

沙梅は、軽快に河べりを横切り、自分の家めざして歩いていった。ひと曲がりすると眼の前に小さなニッパ・ハウスが見えた。

意外なことに、もういとこ姉さんが四歳になる我が子、阿黒^{ア・ヘイ}を連れ帰っていて、入口の敷居の上に腰かけていた。

学校の教師になってから、沙梅は子供を街中に住むいとこ姉さんに預けている。でも、いとこ姉さんは裁縫の仕事が忙しく、よほどのことがない限り、自分で子供を連れてきてくれることはない。いつもは、沙梅が子供を迎えに行って、家へ帰ってから夕飯をとるのだった。

今日はいとこ姉さんが、こんなにあわてて阿黒^{ア・ヘイ}を連れ帰ってきた。胸がドキドキした。

「病院にいる阿代に何かあったんじゃないかしら。」

それ以上考える勇氣もなく、無意識のうちに足の運びが遅くなった。自分の予感が事実になるのを恐れていた。

「ママノママノ」

子供は母親が帰ってきたのをめざとく見つけ、大声を上げながら、走り寄ってきて、ママの手を握った。

「アメ、アメ。」

母親はズックの袋を高く上げて、子供に取らせず、敷居から立ち上がったいとこ姉さんに向って叫んだ。

「姉さんノ」

いつもの通りのあいさつをしながら、姉さんの眼を食い入るような疑問の眼差しで見た。それは

問いかける代りのものであった。『あなたが、ここに来るなんて何かあったんじゃないの。』

「ずい分待ったわ。今日はどうしてこんなに遅かったの。」

いとこ姉さんは答える代りに、顔いっぱいにあわてた表情をみせて沙梅を引っぱった。

「いらっしやい。あんたに話すことがあるの。」

家の中に入ると、いとこ姉さんは厳しい調子で言った。

「阿梅！ 松生が帰ってきたのよ！」

この短い言葉は、棍棒のように沙梅の頭をガンと殴りつけた。二つの眼を大きく見開き、わが耳を信じなかった。

「姉さん、何を言っているの！」

「私が言ってるのは、あんたの松生が帰ってきたということだよ。」

今日の午後、姉さんが洗濯物を干したばかりの時、突然、誰かが自分を訪ねてきた声を聞いた。両手をふきふき階段のところへ出てみると、ポストンバッグを持って入口に立っている男がいた。

その時の姉さんの驚きは、たった今の沙梅の驚きに優るとも劣らぬものであった。

「どうして?! 松生が戻ってきたって本当なの。」

沙梅は小さな椅子に腰かけながら、眼はボンヤリと、ドアの外の暮色を増す河べりを見つめていた。そこには作りかけのドンガンがあり、もっとむこうには川の上に張り出したニッパ・ハウスがあった。輪郭はだんだんにじんていった。橋の上の二つのガス灯には、いつの間にか灯がともされ、黄色い淡い光を放っていた。

「ああ、松生は死んでしまったんじゃないの！ 阿代が私をだますなんて！」

沙梅は両手で顔をおおい、激しくしゃくりあげ始めた。

四年余り前のある日、夜明け前に、日本軍の爆撃機が、この植民地の港の狭い市街に初めて爆弾を落した。その数日後、松生と一緒に船に乗っていた阿代が一人で戻ってきた。汚れたシャツ一枚の着のみのまま。そして悪い報せをもたらした。彼らが働いていた鴨家船^{ヤマガタフネ}は大型ジャンク^{ジャンク}が香港を出港した翌日、開戦となり、船は日本軍に撃沈されたのだ。

「助かったのは全部で五人だけだった。」

逃げ帰ってきた阿代は、沙梅のいろいろな質問に答えた。「松生がどうなったかはわからない。でも、僕の眼の前で海に落ちるのを見た。もしかしたら……。」

その先を、沙梅は聞いていなかった。失神してしまっただけだ。

その後の三年余りの占領期は、長い悪夢のようなものだった。もし阿代がしょっちゅうやってきて、経済的な援助をしなかったなら、沙梅母子はとくに餓死してしまっていただろう。人はやはり感情の動物である。占領二年目の暮に、沙梅は阿代と同居することになった。もちろん、経済的に助けてくれたことに對する感激がおもな理由だったが、実際、阿代も心のやさしい男だった。

しかし、青天の霹靂とでもいおうか、松生が帰ってきたのだ。

「神様……どうしたらいいんでしょう。」

肩に手がかけられた。泣くのはおよしといういとこ姉さんの無言の慰めであった。

「わえ、こうなった以上、泣いたって仕方がないよ。何か方法を考えなくっちゃ。」

「私……私にどんな方法があるの……。」

嗚咽はさらに激しくなった。

まだちっちゃな子供の阿黒も、眼をパッチリ開けて、一部始終を見ていたが、突然大声で泣き始めた。

母親は子供を抱き上げ、しっかりと胸に抱き、涙でグショグショになった顔を子供の小さな頬にすりつけながら、一層声を高くしてしゃくり上げた。

「なんてみじめな運命なの……。」

いとこ姉さんはしばらく黙っていたが、やがて一つの意見を出した。

「あんたは、しばらくの間、阿代のことを松生に言わない方がいいよ。幸い、阿代は今病院にいるから、このやり方はうまくいくよ。」

姉さんは、今しがた松生をだますことにして、自分の家に置いてきたのだ。そして、大急ぎで沙梅に知らせに来て、準備の時間をかせがせたのだ。

「でも、それで何日間ごまかせるの。」

「それはなんとも言えないわ。」姉さんはタメ息まじりに言った。

「一日ごまかせれば一日。そのあとはまたチャンスを見ながら考えていかなきゃ。」

沙梅の心はひどく乱れ、何ひとつ考えることが出来なかった。

入口から出ようとした時、姉さんは壁にかけてある阿代の写真に眼をやって、言った。

「阿梅、阿代のものは早く片付けておかなきゃダメよ。」

2

太陽がやっと河べりを照らし始めたころ、沙梅はベッドから起き上がった。わきに寝ている松生

に眼をやると、やっと帰ってきた流浪人はまだ高イビキをかいて寝ていた。沙梅はねむい眼をこすりながら朝食を作るため台所へ行った。今日は休みだから、家でずっと松生と一緒にいるわけだ。でも、そんなことはできない。松生といえることは恐ろしい。夫を見ていると、後めたい、罪を犯した思いに襲われるのだった。どうしてもながく一緒にいることは避けたい。しかし、阿黒がいる。小さな子供はおしゃべりだ。昨夜、阿黒には、新しく来た男の人の前で、病院にいるパパのことを話してはダメよと言ってきかせた。でも、たった四歳の子に何が理解できるというのだ。家に残していけば秘密はすぐバレてしまう。やはり、姉さんのところへ連れていくのが一番いい。とくに重要なのは、無理にでも自分自身に用事を作ることだ。自分を忙しくしておけば、苦しい境遇を考えなくてすむというものだ。

沙梅の頭の中は、もうメチャクチャで、米を鍋の中に入れたあと、といだかどうかからなくなってしまうた。

松生はいつの間にかベッドから起き、タオルを持って台所へやってきた。鍋をのぞき込んで言った。

「阿梅、なんでこんなに早くからご飯をたいているんだ。」

「早くご飯を食べて、学校へいかなきゃならないの。」と、菜っ葉を切るのを止めて答えた。「松生、ゆうべはよく眠れた。」

「ここはすごく快適だ。とても涼しい。今眼が覚めたところだ。見てごらん、すっかり明るくなった。」

松生の声ははずんでいた。熱帯の夜明けの空気のようにスッキリと明快であった。

しかし、その声もすぐに渋くなった。

「ねえ、君、きょうは家にいたらどう？」

「ええ、でもそうはいかないのよ。」

沙梅は苦笑しながら、まぶたを閉じていった。目線を合わせることができなかった。

「学校には校長と教員は私一人しかないの。子供はみんな暴れん坊でしょ。私が行かないと校長一人では手に負えないのよ。」

朝御飯の仕度が出来た。沙梅は熱々の御飯やおかずをテーブルに並べ終って、ハシを持ってこなかったことに気付いた。台所へ取りに戻ろうとした時、阿黒が眼を覚まして寝室で騒ぎ始めた。

「ママ！ママ！」

沙梅は寝室へ行つて阿黒を抱き上げ、客間へ連れて行き、小さな椅子に腰かけさせた。

「阿黒、しばらくおとなしくしてるのよ。ママが顔を洗ってあげるから、そしたら御飯よ。」
松生もやってきた、手を叩いた。

「おいで、パパが抱いてあげよう。」

そういいながら、子供を抱き上げ、顔を子供の頬にすりつけた。

「さあ、パパにチューをしておくれ。」

「やだ、やだ。」

子供は小さな頭を振ってイヤイヤをし、知らないおじさんから必死で逃れようとした。

「僕のパパなんかじゃない。パパは……。」

子供は言いかけて急に押し黙った。ママが大きな眼でジーンと睨んでいるのを見てびくくりした

のだ。子供は、ゆうべママが命令したことを思い出した。

「死に損ない！ パバのことをそんな風に言うなんて。」ママは大声で怒鳴った。

「まあまあ、この子をそんなに咎めることはないよ。」松生は子供をかばった。「この子は生れて初めてパパをみたんだから。」

そのまま食卓について朝御飯を食べたが、沙梅の緊張した神経はまだゆるんではいなかった。顔は青ざめ、呼吸は早く、指先はずっと神経質に震えていた。

松生ははその様子をジッと見つめて、すまなそうに「阿梅、君は疲れているんだろう。やっぱり、今日一日休んだ方がいいよ。学校へ行くのはよして。」

沙梅は首を振った。

夫は沙梅の興奮ぶりを完全に誤解し、自分が突然戻ってきて一緒になったため引き起したものと単純に考えた。もし沙梅が他の男に心変わりし、しかも同居までしていたことを知ったら、どんなに苦痛を感じたことだろう。

沙梅は食事をしながら茶碗のわきからチラッと松生を見てみた。四、五年前とほとんど変わっていない。ただ額のシワが増え、髪の毛が少し薄くなった程度で、昔と変らぬ性格、親切で思いやりのある男なのだ。

松生は妻を愛し、沙梅も松生を愛している。とくに眼の前でみると、いっそう強く愛を感じる。しかし、彼女は夫に対して罪を犯した、不貞の妻なのだ。松生は永遠に許してくれないかもしれない。沙梅は永遠に彼を失うかもしれない。

ああ、みんな阿代が悪いのだ。こんなことになったのも、みんな阿代から起きたことだ。違う、